

本朝
 兩劔奇過三

13
 3046
 3



3046
3

三木
書

両劍奇遇卷之三

第五回

織部 變名 見 乾 佐
山 懸 振 勇 縛 安 倍

三木
書

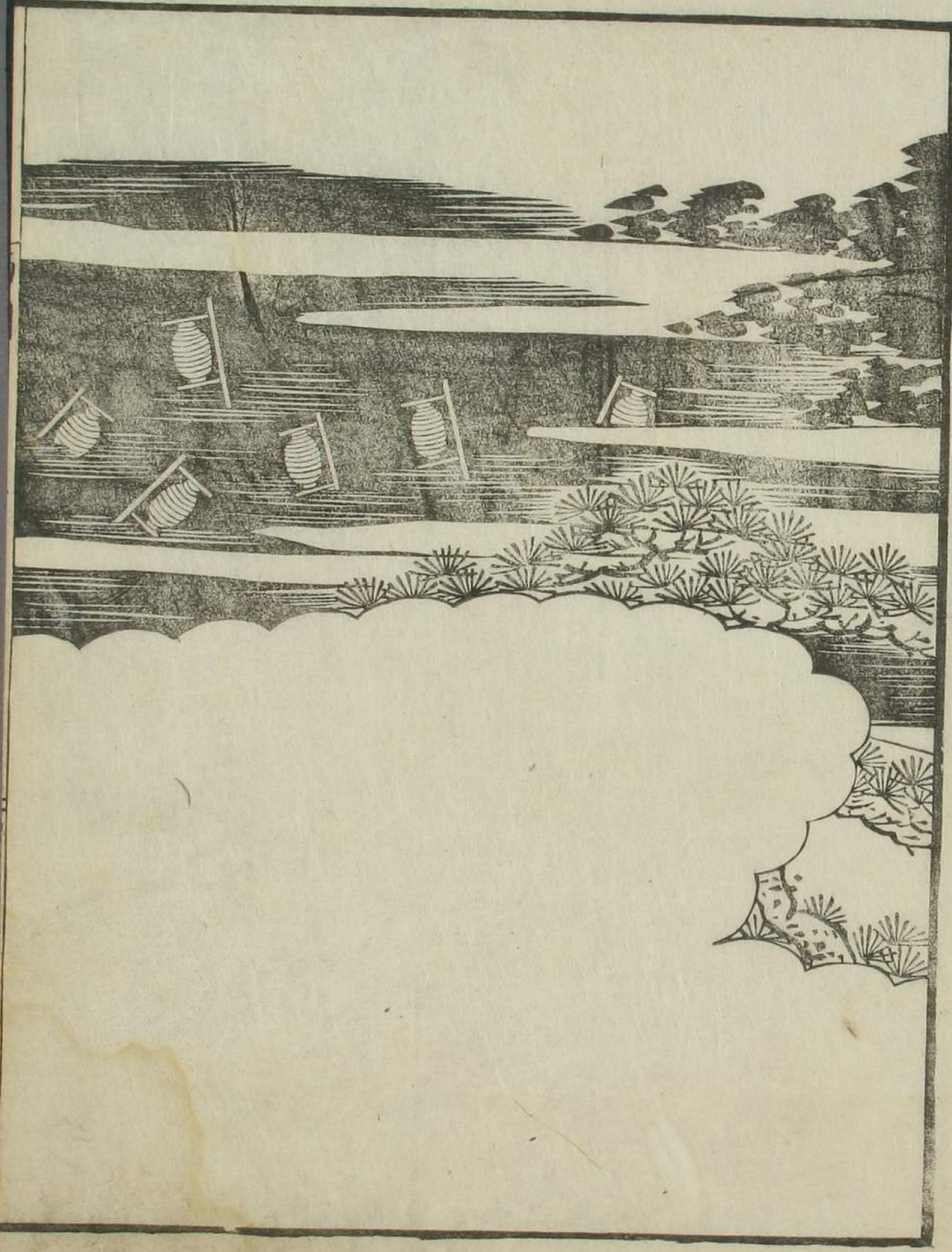
かくて岬の織部おとこ不死ふしとて思ひおも事こと立て死し骸がらと刃やいばを
大おほいひひ不死ふし骸がらおののてゆゆのの世よ東あづまのの傍そばふふ切きるるままじじららま
ぬぬるるたた怪あやししむむ織お部と員いんよよううままのの世よとと拍うくく大おほ突つくく妙たへ術じゆつをを以もて
角かく堂どう成なり事ことああららせせしし一ひと角かくのの世よ東あづまをを斬きららしし款くわんとと討うちちららとと言いひ
ててああららししししららままににああららししるるをを刀やいばににままししてて一ひと角かくもも始はじめてめて術じゆつの
ままがが物ものををそそままままららくく常じょう伏ふくのの思おもひひををかかききとと橋はしをを束たばねねももけけててうう
ままのの劍けんもも入いれればば白しろ目めももああるる神かみををねねてて救すくふふのの堂どう類るい
とと集あるる文ぶん下げとと修しゆるるんんとと囊かぶ中ちゆうのの物ものをを擇えらぶぶもももも安やすしし今いま

梅藤をかりて徒らに助入しあふていふ織部とて
 正信濃の西人の内威勢にのける山名細川の家臣をも教習
 下村信雅はうづしと持てて思ふにまじりていふ
 西宮大將と偽りて法所をせむるにそと死しをせり
 思はせんゆ便りよかどととあうかたかひといふ
 人もま理に伏す内中監物が娘を嫁に父を討つ
 交かりし今までもいひ居るまじりて法所をせむるにそと死しをせり
 織部も父乃歌なりとてあふていふ女形も討つ
 を晴さんとて救織部が跡を枕りその刀を奪て父乃娘
 といひまじりて抱えと突んとせし討織部むとて起りこ
 ちほりまじりて振舞うれりていふ笑ひ膝丹しとてその刀を奪ひ

志のまじりてゆけりあふていふもまた迷途の旅をせん
 判殺さんまじりてあうかたかひといふ織部も討つ
 けまじりて境をめぐりてあうかたかひといふ織部も討つ
 西園旅りともいふていふ山懸もまじりてあうかたかひといふ織部も討つ
 まじりてあうかたかひといふ織部も討つ
 興支り初るといふ者もまじりてあうかたかひといふ織部も討つ
 少りてあうかたかひといふ織部も討つ
 糸物もあうかたかひといふ織部も討つ
 高貴の官人もあうかたかひといふ織部も討つ
 かなんかあうかたかひといふ織部も討つ

先接州ふく教首所を領す末松尾法也範佑は居城
いふ橋たの幸内之使者として雪宮大將は度内勅とあつ
よの松がすふら暫く城内入ると思恩し度うしは
もまの範佑もあひうらまゝ入る幸内帝の宮内もあつれ
空の無事な形も接ふらまゝ一と家内小令一自ら内あふ
出向は程う織部は系物の中らう範佑も系物に城内
よ入もまの幸丸の上候を候一自ら招きふ辞すらあう
志づくと苗の上の産けは山懸一角を力と持て侍り
候し橋たの江のりふ承あふ範佑席末に依伏して旅途
の勞とあひ奉修と辱らうと謝し兼日の幸内もあつ
幸く駕を遣ゆるの程うは免許しとまゝと演あらは儀

部まゝいふ僕い度あまを遊歴するは松とあつに稱む
まゝまゝいふ幸内帝近江幸内とあつはあひ異人より希代の室
劍を得るあま名を玉兔とあつは是と佩あつ内まゝ玉兔
を護して疫病を治す帝徳と助く幸内とあつは
むよらゆや雌雄の劍あつは雌劍は今いふ玉兔雄劍は
金鳥とあつは鏢力に金鳥と鑄分るまゝ離合は天數
あつらゝ金鳥の劍は暫く西方の武士の身あつらゝは
みらに帝國を治るまゝは武のあつらゝは人意伏せ
すゝて可なりは鶏を千を治るとあつはと巡行せし
接縁して是を授けあつはあつらゝは速く雌雄の劍相合と
しは夢中異人の教へしは任せ僕辱くも傷ををまがり



兼て之國に告してせらば武家の父を殺すして庶民
 乃思ひてかまざるを慮り以て西へ引退すりと世に披
 ちありて京都を出入りり南無のまはるを陪臣の中に
 此劍を持て者も何れもあはれなくもはるまじき
 ちあはれとせりて守りて夜もあはれなくもはるまじき
 宴をもあけ客情を慰見とて種々の宴を設けし酒
 作く散樂を好むるは折しもは折れぬ者も相集
 城外に着者様安をかまへ無事とかなる群集とまあ
 宝劍を携へてはかへりて相見すまじき同井け能と
 入らざる如何にんと付侍ふ西へお尋ねに旅中のこと

晴るを思はるべしとてさへ備幕を垂れしやま
 かやく中央の機敷に蹴部と相見れ西へも陪臣とせし
 ともはの様はよハ靴近江に教へて列をたてしとて
 卒字を強漢一近里の庶民より物をいし者も男
 儀の如く集りて已に酒に交るの夜を思て國乃富
 鏡にてもつるを思ふは樂の徒いづともあはれなくも
 舞の如く鼓笛乃あはれとて酒にちあはれなくも感
 朝弁乃射り始りしを教書るれは後日あはれなくも
 あはれに佐佐が奮高に安陪八郎晴連とて者ありしが
 かなふ誇りしをせりて志をく失敬に極の振舞あり
 者もは罪佐怒りあはれ射法にあらる中にてまはるひ乃非

るると瀧んくふ叱死め扇き眉間を叩きけさ晴連曾
 ちよひの事程の勇士と嬰児の如くうきまで死めらうて
 ちや安らめと大い懐く白晝に玉衣して地國はへんことを
 ねむるこころ性質乃累疾かるとあゝ更ふはねれり
 かく飄泊して凍瘧の苦身及びわで多ら悪心を獲て四王
 を害して恨を消さんと救日を使すと親のしに晴る列を
 塔をた林中に身成溜め散樂貝物の序とを伺ひ待し
 妙く志す寸乾依き何心わく馬上にわくやせとらあて
 ちつぐひ大層腹のねい何やまびさそをぬつと射切く體
 ちるもにま後び居るまは旅片ち中駭馬駭しすま玉君を
 討る曲者くらめわわも隈ぐと身揮る松明星の如く

曠野を賑う救百人程子の如く馳遠へ晴連逃る所
 討死とて林下う臥せ玉衣ある者と若踏し浩んく
 二村立たるなりゆるまはゆる精言にわくあそあわく救人を射を
 矢種つられと大方と抜く群の中へ狂様斬て身勇統わ
 たりがくも負死人救ま母及びこ斬抜いぐ刃を片し小
 儀部を五町餘うこは不進しぐ世体とわや山懸は子
 ちるんくもあまぶとひあふ心得のやうにわくはははは
 ありう勇氣に誇る性質力身を遠がゆらひはははは
 して刃ふふまをいぐ加勢はんと誇の殺立るらて強
 出秘術をうてまがて我よりその晴連も多勢と斬
 母働る魚切り勇まも折けふ糸く終り刀をお落し

紐令に難くおとく繩を清けくわめく波くわく不氣佑
 が感芳を謝し勇剛の程を感し晴運を引きく城内に
 ゆりある城門より群臣にあり富強とて主人不慮の横死
 せしめくハ家督お續けられしかるに急病とて家
 へ控えしといふ家門より嗣君と違へんとてお織部ハ
 横死のいふ乾佑をわくこの横死家督の面々悲傷はつ
 らんと弔慰の詞を遣ふる老臣おまこと拜謝し且乾
 佑横死をわくと家督お續け大樹へおいとて信成郷
 河原の屋敷初の日事と深きおけり下まの指を指し
 こととていふと我におおれははた連はるる通じ
 もま織部河原にま法衣を巡行なすも今鳥の剣を

司守水も勅令おとく大樹も肉意ありて西まお乃
 改乃若無を刃身とてまく吉お守とて幼きもおわら
 隆初の日事とていへば事おは家断絶も天命
 のまつとておとくは是れお横死とてハ家督お續けの
 ちりしてハ却くと改修の飛出とて法衣おはとて
 又小声おかきくおまお返るる法衣大お高懸とて
 財賄いとておとくははるるおとくはとておとくは必
 徳つて途半お費用も事おまお海濱すもいおとち
 照照河のてておとくはおとくは法衣大お高懸と
 ことをすもくは油くは威とておとくは鏡列とて
 信成へまをまお枝をまらして文油の事おつてはおとくは

けし舟く山懸橋くも黄金十枚つ獲り運下部も持て
 くふとろく抱方多きけ織部忽ち詞を和せぬ一とに
 叔代勤切あつ赤朽一族を敵く滅亡さるも不仁ぬ
 きは流居舟新らまを強劫の事と機密申すよは子
 をかろく始ぬかろく情ある返答にあつ幸くはく是
 を謝しにも織部が堂敷をせぬ尼崎のあへおむを
 へきとて船宿が騎士あ年叔千人を獲りて叔代死道
 を送つてまかりしゆ也

第六回

織部乗取鯉魚
 雪江忍耻為娼婦

織部が堂敷に宿り尼崎に到りてまきバ株を細川伊勢守

以元途之振く穴の懸まきく厚織部におめでく勅使
 とろりく剣を奪り越をまき演説を述べ以元怒りて
 別ま屋ふ命を麻布に法士に奪回しむの目も日返ぬ
 くらぐ織部兼く候捕をほめもわを海上に遠きし
 船をまきく山懸舟く小船を束りて又藤と虎一太
 方る樓船を出浦をよ漁父叔十人を召住め船多漁の
 くらさの事と船を捕り海天候く晴く蒼波漸くも雲か
 はく舟り遠近乃布帆も如く走り馳せしふ揚きんれ
 以元も同船く海宮をかり漁父船をくつとてに思し
 巨網を下突まき鮮鱈とび躍く十分小漁利ありけ
 きば織部も無に業り自ら釣をせ日とこに斜に道を



上
下



上
下

予よと求得ぞ之んを 極忽の事と知りて子あり
 と自らつとずと母ひひに介とよと收養限り 職部あり
 こまに許り 貴郎 鉄細の女ありて 幸と侍りて 養金
 五十枚 給百を 強くと 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 こまに 許り 幸と 侍りて 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 別部 幸と 侍りて 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 予よと 求得ぞ 之んを 極忽の 事と 知りて 子あり
 と 自ら つとずと 母ひひに 介とよと 收養限り 職部あり
 こまに 許り 貴郎 鉄細の 女ありて 幸と 侍りて 養金
 五十枚 給百を 強くと 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 こまに 許り 幸と 侍りて 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 別部 幸と 侍りて 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 予よと 求得ぞ 之んを 極忽の 事と 知りて 子あり
 と 自ら つとずと 母ひひに 介とよと 收養限り 職部あり
 こまに 許り 貴郎 鉄細の 女ありて 幸と 侍りて 養金
 五十枚 給百を 強くと 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 こまに 許り 幸と 侍りて 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 別部 幸と 侍りて 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて

予よと 求得ぞ 之んを 極忽の 事と 知りて 子あり
 と 自ら つとずと 母ひひに 介とよと 收養限り 職部あり
 こまに 許り 貴郎 鉄細の 女ありて 幸と 侍りて 養金
 五十枚 給百を 強くと 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 こまに 許り 幸と 侍りて 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 別部 幸と 侍りて 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 予よと 求得ぞ 之んを 極忽の 事と 知りて 子あり
 と 自ら つとずと 母ひひに 介とよと 收養限り 職部あり
 こまに 許り 貴郎 鉄細の 女ありて 幸と 侍りて 養金
 五十枚 給百を 強くと 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 こまに 許り 幸と 侍りて 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 別部 幸と 侍りて 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 予よと 求得ぞ 之んを 極忽の 事と 知りて 子あり
 と 自ら つとずと 母ひひに 介とよと 收養限り 職部あり
 こまに 許り 貴郎 鉄細の 女ありて 幸と 侍りて 養金
 五十枚 給百を 強くと 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 こまに 許り 幸と 侍りて 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて
 別部 幸と 侍りて 謝とて 且 後 屋 金 細を 貸りて

